様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２３００７

研究課題名（和文）神将形図像の転用、継承の研究

研究課題名（英文）Study of the diversion of the iconography in the form of a divine general

研究代表者
田中　水萌（Tanaka, Mizuho）

神戸大学・人文学研究科・人文学研究科研究員

研究者番号：７０８４４９８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、仏画上の本尊の周辺に描かれている天部の諸尊のうち、武装した尊格を神将形と称して取り扱い、尊名に関わらず異なる尊格間で図像の転用・引用が行われ、図像の「形」のみが型紙のように扱われていたことを検討した。
十六善神および二十八部衆を中心に図像を比較した結果、複数の作品において異なる尊格間で白描図像等を引用・転用し、本尊を囲繞する天部等の図像を構成する作例が見出せたことから、図像を型紙としてその「形」のみを用いて新たな図像を作成していることが明らかであった。課題は多くあるが、今後神将形図像を検討するうえで基準となる成果は得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本尊の周囲に描かれる天部等の研究において、作品個別の図像的な典拠を求めることはあっても、逆に典拠となった図像がその作品を含めてほかのどのような作品に引用・転用されたのか、大系的にまとめられることがなかった。
本研究は多くの図像を比較することで、神将形図像の引用・転用関係について、また複数で構成される天部等の像容についての基礎的な研究となることを目的としたため、今後の本分野の研究の発展に貢献する可能性を有する。

研究成果の概要（英文）：This study verifies that the various heavenly deities depicted around the principal image in Buddhist paintings are appropriated and quoted among different heavenly deities regardless of their names, and that only the "form" of the image is treated like a pattern.
After comparing iconographies focusing on the Jurokuzenshin(sixteen guardian deities) and the Nijuhachibushu(twenty-eight attendants of Senju Kannon),it was found that there are examples of iconographies surrounding the principal image being created by citing Hakubyo iconographies or appropriating them between different deities. In this way, it became clear that new iconographies were created using only the "form" of the iconography as a pattern. Although many issues remain to be addressed, the results provide a base for future iconographic research.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術史　仏画　神将形図像

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究では本尊の周辺に描かれる天部等において、異なる尊格間での図像の転用関係を明らかとすることを目的とした。

奈良国立博物館「辟邪絵」（12 世紀）については豊富な先行研究の積み重ねがあり、たとえば鍾馗図については板倉聖哲氏によって元代の秦子晋撰『新編連相搜神広記（建安版）』の挿図に「ほぼ一致する」と指摘される図像がある（「日本が見た東アジア美術」『日本美術全集６』2015 年）。また毘沙門天図については宮島新一氏や梅沢恵氏によって矢を剥ぐ毘沙門天図像の例や、「辟邪絵」において毘沙門天に射られる有翼の鬼神と類似する鬼神に、その眷属が矢を射かける図が見られることを指摘された（宮島「辟邪絵―わが国における受容―」『美術研究』331、1985 年、梅沢「矢を矧ぐ毘沙門天像と「辟邪絵」の主題」『中世絵画のマトリックスⅡ』青簡舎、2014 年）。

しかしながら、天刑星図は百橋明穂氏が東大寺「大天神」に形が類似することを指摘されるものの、神虫図、栴檀乾闥婆図を含め未だに図像の典拠や詞書の出典など、すべてが明らかとなっているわけではない。

報告者は 2018 年度に提出した博士論文において、栴檀乾闥婆が被る獅子冠に二本の長い角を有するという特徴を、長寛三年（1165）写、実任本「般若十六善神図像」（個人蔵）に描かれた十六善神の「右五」とされる尊格に見出せることを指摘した。両者を比較し、持物や甲制、前歯で下唇を噛むという顔貌表現等にも類似性が認められると考える。

このように天刑星と大天神、栴檀乾闥婆と十六善神といった異なる名称、意味を持つ尊格間において図像が同様の特徴を有する場合、その特徴を転用する可能性があるのか、転用する可能性があるのであれば、天部等を描いた白描図像や版画などに「辟邪絵」の典拠となるような図像が見出せるのではないかと考えた。

２．研究の目的

「辟邪絵」栴檀乾闥婆図の有角の獅子冠に着目するため、仏画上の本尊の周辺に描かれている四天王や二十八部衆、十六善神、十二神将などといった天部の諸尊のうち、とくに人および鬼形で武装した尊格を神将形と称して取り扱い、これらの諸尊間において、尊名に関わらず異なる尊格間で図像の転用・引用が行われ、図像の「形」のみが型紙のように扱われ転用されていたことを明らかにすることを目指した。

実任本「般若十六善神図像」の転用については林温氏が検討され、滋賀・聖衆来迎寺や香雪美術館等が所蔵する「釈迦十六善神像」に図像が転用されていることが指摘される（林温「図案集としての武将神図像」『佛教藝術』216号、1994年）。これまでの研究においては、作品個別の図像的な典拠を求めることはあっても、逆に典拠となった図像がその作品を含めてほかのどのような作品に転用されたのか、大系的にまとめられることがなかった。神将形図像についての研究も同様に、これまでに大系的な研究は実施されていない。

本研究においては比較対象とする図像を増やすことで、神将形図像の転用関係について、また複数で構成される天部等の像容についての基礎的な研究となることを目的とした。

３．研究の方法

「辟邪絵」栴檀乾闥婆図と類似する有角の獅子冠を被る尊格を含む十六善神、および乾闥婆を含む二十八部衆（八部衆）を中心に、図像と先行研究を収集して比較し、転用関係が見出せるか検討した。

十六善神、および二十八部衆は経典等において尊名や像容が示されるが、現存作例によっては経典等の記述とは異なる像容であらわされることも多く、尊名の比定は難しい。本研究においては尊名の明らかでない図像は番号で区別し、主に十四世紀頃までに制作された以下の絵画作品の図像を比較の対象とした。

（閲覧調査や展覧会などで実際に作品の観察を行ったものについては下線で示す。）

【白描図像および版画】

個人蔵「般若十六善神像」（実任本）、益田家旧蔵（現在諸家分蔵）「十二神将図像」（定智本）、京都・仁和寺「十二神将図像」（金岡様）、大東急記念文庫「四天王図像」（河成様）、奈良国立博物館「東大寺戒壇院厨子扉絵図像」、根津美術館「四天王図像」、京都・仁和寺「十二神将図像」、『別尊雑記』「千手観音二十八部衆像」、和歌山・高野山金剛三昧院「二十八部衆幷十二神将図」（大正図像七巻）、清凉寺釈迦如来立像納入「霊山変相図」、東京国立博物館「千手観音二十八部衆像」

【彩色の作品】

米国・クリーブランド美術館「大般若経厨子扉絵」、米国・メトロポリタン美術館「釈迦三尊十六善神像」「観音経絵巻」、滋賀・石山寺「仏涅槃図」、「星曼荼羅」三幅、京都・永観堂禅林寺「釈迦十六善神像」「千手観音二十八部衆像」、福井・おおい町懺法講「千手観音二十八部衆像」、大倉集古館「釈迦十六善神像」、京都国立博物館「釈迦金棺出現図」、兵庫・黒野神社「釈迦十六善神像」、香雪美術館「釈迦十六善神像」「千手観音二十八部衆像」、国立故宮博物院「千手観音像」、奈良・西大寺「釈迦三尊十六善神像」、大阪・四天王寺「千手観音二十八部衆像」兵庫・聖徳寺「釈迦十六善神像」、京都・醍醐寺「般若菩薩曼荼羅図」、滋賀・大清寺「千手観音二十八部衆像」、奈良・達磨寺「玄奘三蔵十六善神像」、東京国立博物館「釈迦十六善神像」、奈良・唐招提寺「薬師十二神将像」、愛知・七寺「一切経唐櫃中蓋漆絵」、奈良国立博物館「辟邪絵」栴檀乾闥婆図、「釈迦十六善神像」、「大般若経厨子扉絵」、京都・南禅寺「釈迦三尊十六善神図」、京都・仁和寺「千手観音二十八部衆像」、根津美術館「千手観音二十八部衆像」、福井・羽賀寺「釈迦十六善神像」、細見美術館「千手観音二十八部衆像」、奈良・薬師寺「釈迦十六善神像」四幅、龍谷ミュージアム「釈迦十六善神像」

これらの作品における神将形図像を中心とした天部等の図像において、像容、体勢、持物の３点から比較を行った。さらに図像を型紙のようにそのまま引用しているのか、また持物や着衣などに細かな変更箇所があるのかといった点にも着目した。

４．研究成果

十六善神像においては複数の四天王像の組み合わせや、四天王と十二神将像の組み合わせな

ど、図像を構成するうえでのパターンがあり、複数の作品において異なる尊格間での白描図像等を引用する作例が見出せた。図像を型紙として、その「形」のみを用いて新たな図像を作成していることが明らかであるといえる。このことについては「十六善神を中心とする神将形図像の検討」（神戸大学美術史研究会『美術史論集』20、2021 年）としてまとめて公表した。

二十八部衆像については画中に尊名が記された細見美術館「千手観音二十八部衆像」（以下、細見美術館本）と永観堂禅林寺「千手観音二十八部衆像」（永観堂本）を基準とし、諸本の比較を行った。

仁王、四天王、梵天・帝釈天、婆藪仙・功徳天のほか阿修羅、迦楼羅、神母女など像容に特徴のある天部の図像は、その特徴が諸本間で共通し尊名の比定がある程度可能であった。その他の諸天部は経典等を参照し尊名の検討を行ったが、細見美術館本の時点でかなり尊名に混乱が見られる。また尊名の明らかな尊格においても、その像容は諸本間で異なることがある。

たとえば迦楼羅は細見美術館本においては肉垂を嘴の下にそなえた鳥を頭に頂き、法螺貝を持つ姿が描かれていた。顔貌は鷲鼻、大きな耳、炎髪という特徴はあるが、ほかの鬼形の天部像との差異はあまりない。ところが永観堂本では頭部の鳥は失われ、迦楼羅自身の顔が鳥のように変化し、背中に翼を生やして横笛を吹く姿となっている。滋賀・大清寺「千手観音二十八部衆像」（以下、大清寺本）などでは顔の周りに鶏冠や肉垂をそなえ、ますます鶏に近い顔貌で描かれている。

「辟邪絵」栴檀乾闥婆の特徴として注目する有角の獅子冠を被る神将形は、二十八部衆像においては白描の東京国立博物館「千手観音二十八部衆像」の画面に向かって左、上から五番目の右手に剣を執る尊格にみられた。角はかなり短いが、左手の手の形や本尊を見上げる姿は実任本「般若十六善神図像」「右五」像に近い。

角はないが、大清寺本をはじめ二十八部衆の構成がほぼ一致する香雪美術館および根津美術館の所蔵する「千手観音二十八部衆像」（以下、香雪美術館本、根津美術館本）には獅子冠を被る神将形が描かれていた。その尊名は不明であるが胸前に山羊を抱いている。これは奈良・唐招提寺「薬師十二神将像」戌神が犬を抱く図像にも通じる。

このように動物を抱く尊格は、清涼寺釈迦如来立像納入品「霊山変相図」において釈迦を囲繞する天部像の中にも見られる。ここでは獅子冠を被り獅子を抱く神将形と鹿のような有角の獣を抱く神将形が対となってあらわされる。

「霊山変相図」の釈迦の周囲には十大弟子を除くと二十の天部らしき尊格の姿があり、仁王や龍王をはじめ天部等も左右で対となるよう描かれている。「霊山変相図」の仁王周辺の群像部分については、仁和寺『別尊雑記』巻十七の千手観音二十八部衆像と構成が近似することが増記隆介氏によって指摘され（『アジア遊学 274　呉越国－10 世紀東アジアに華開いた文化国家』勉誠社、2022 年）、大清寺本、香雪美術館本、根津美術館本の二十八部衆像にもいくつか類似する天部の姿が描かれている。中には「霊山変相図」に描かれていた対の二尊の図像が合わさり、一つの尊格の図像となったと考えられるものも見られ、獅子冠の尊格も同様に獅子冠を被り有角の獣を抱く神将形となった可能性を考えたい。

二十八部衆像においても十六善神像と同様に、体勢から四天王図像にその尊格の特徴を付与するものも見られた。たとえば永観堂本の難陀龍王像は龍を肩に乗せるという特徴があらわされるが、その姿は仁和寺「十二神将図像」や奈良国立博物館「東大寺戒壇院厨子扉絵図像」にみられる、武装し右手に執る剣の切っ先を地面につける神将形図像に類似する。これらの二十八部衆像の引用・転用関係についての詳細な検討については後日公表する準備を行っている。

作品の来歴や制作背景については不明なことも多く、作品同士を結び付けられるような絵師

や僧侶の存在については検討しきれなかった。どのような背景から新しい図像を制作する際に、複数の図像から天部図像を引用して組み合わせて再構成するに至ったのか、今後の検討課題としたい。

以上のように課題は多く残るが、本研究は今後神将形を含む天部等の図像を検討するうえで基準となる成果が得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 田中水萌	４．巻 21
２．論文標題 十六善神を中心とした神将形図像の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 美術史論集	６．最初と最後の頁 219-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012550	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関